台大日本語文研究第 41 期
2021 年 06 月，頁 21-40
2021-03-25 收稿，2021-05-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202106_(41).0002

全球時代視域下的生態女性主義視點閱讀多和田葉子《來自星星的訊息》：聚焦於「神的孩子都在跳舞」含意一

曾秋桂*

摘要

本論文、生態女性主義視點論述多和田葉子下意識創作三部作的第一本《在地球各角落發光發亮》與第二本《來自星星的訊息》對照比較的成果。考察結果顯示《在地球各角落發光發亮》中總括出全球時代中地球上的人類所必須面對的外在生態女性主義的課題。而《來自星星的訊息》則是聚焦於登場人物的內心層面的問題「心靈創傷」。

更從作品中可被認定為「神之子們」以及他們牽手「舞蹈」的動作，聯想到村上春樹著名短篇小說集《神的小孩子們都在跳舞》。村上春樹於該作品中開出了面對創傷是發覺創傷，從中展開下一個行動的處方箋。而多和田葉子也於《來自星星的訊息》開出了處方箋。那即是無論人們間劃清界線，製造藩籬、國界，但從地球以外的星球來看畢竟只不過是地球上生活的人類而已。即使人們間製造了藩籬，只要配合他人的步划「舞蹈」，就能消彌彼此的歧見。

2019 年之後常被名列獲得諾貝爾文學獎呼聲極高的村上春樹與多和田葉子兩位作家所開出的處方箋，正是 2019 年起蔓延全球禍害的新冠肺炎時代中人們，一帖新生活方式的提示。

關鍵詞：多和田葉子、《來自星星的訊息》、村上春樹、《神的小孩子們都在跳舞》、處方箋

* 淡江大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Reading Yoko Tawada's "Implied by the Stars" from the Perspective of Ecofeminism in the Age of Globalization: On the Meaning of "All God's Children Dance“

Tseng Chiu Kuei*

Abstract

This paper contrasts and compares Yoko Tawada's first and second works in her deliberately created trilogy, "Dusted by Earth" and "Implied by a Star" from the perspective of ecofeminism. As a result of the discussion, it was found that compared to the external eco-feminist issues that humanity on earth should face in the global age, which could be lumped together in "Dusted on the Earth," "Implied in the Stars" focuses on the internal issues of the characters, "heartbreak" (weakness).

Furthermore, the characters who can be seen as "God's children" and their "dancing" in the work remind me of Haruki Murakami's short story collection, "All God's Children Can Dance". In Haruki Murakami's "All God's Children Can Dancing," he presents a formula for realizing the existence of trauma by confronting it, and developing the next step of action from there. In contrast, Yoko Tawada's "Implied by a Star" suggests that no matter how many boundaries humans draw between themselves to create walls and borders, from the perspective of the rest of the planet, they are just human beings living on a single ball called Earth. In this book, a prescription is presented that by "dancing" to the steps and pace of others, we can overcome our differences and disagreements.

The prescriptions presented by Haruki Murakami and Yoko Tawada, both of whom are listed as Japanese candidates for the Nobel Prize in Literature from 2019, sound particularly meaningful as a way of life

* Professor, Department of Japanese Language and Literature, Tamkang University

臺灣大學學術期刊資料庫

because we are living in the era of the Corona disaster.

Key words: Yoko Tawada, "Implied by a Star", Haruki Murakami,
"All God's Children Can Dance”, prescriptions

臺灣大學學術期刊資料庫

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』
—「神の子どもたちはみんな踊る」の意味をめぐって—

曾秋桂*

要旨

本論文は、エコフェミニズムの視点から、多和田葉子が意図的に創作する三部作の一作目『地球にちりばめられて』と二作目『星に仄めかされて』とを対照・比較したものである。考察した結果、『地球にちりばめられて』で一括りにできたグローバル時代において地球の人類が直面すべき外的なエコフェミニズム的課題と比べて、『星に仄めかされて』では、人物の内面的問題「心の傷」（弱み）が焦点化されていることが分かった。

さらに、作品中、「神の子どもたち」と見てもよい登場人物と彼らが「踊る」ことからは、村上春樹の短篇小説集『神の子どもたちはみな踊る』が連想される。村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』では、トラウマと向き合うことでトラウマの存在に気が付き、そこから次のステップへの行動を展開する処方が提示されている。それに対して、多和田葉子の『星に仄めかされて』では、人間同士がどれだけ境界線を引いて壁、国境を作ろうとしても、地球以外の星から見れば、所詮一つの地球というボールで暮らしている人類に過ぎず、人間同士で作った壁も、他人のステップ、ペースに合わせて「踊る」ことにより、相互の相違や意見の齟齬を乗り越えられるという処方が提示されている。

2019 年以後、ノーベル文学賞受賞日本人候補者として名前が列ねられた村上春樹と多和田葉子が提示した処方は、正にコロナ禍の時代を生きているために、一つの生き方としてとりわけ意味深長なも

* 淡江大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

ののように響いて聞こえてくる。

キーワード：多和田葉子、『星に仄めかされて』、村上春樹、
『神の子どもたちはみな踊る』、処方

臺灣大學學術期刊資料庫

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』
—「神の子どもたちはみんな踊る」の意味をめぐって—

曾秋桂

一、はじめに

名高い越境作家[1]の多和田葉子は、2019 年以後、ノーベル文学賞受賞日本人候補者として村上春樹と並んで名前が挙がるようになり、国際社会で一層脚光を浴びている。日本社会に大きな打撃を与えた東日本大震災（2011.3.11）以後、多和田葉子が原発問題を取り扱い、発表した「不死の島」（2012 年、鈴木哲発行『それでも三月は、また』に収録、講談社）は、再度『献灯使』（2014 年、講談社）に収録された。その『献灯使』が 2018 年度国際交流基金賞を受賞し、同じく 2018 年 11 月にアメリカで最も権威のある全米図書賞（翻訳文学部門、英語版”The Emissary”）も獲得し、36 年ぶりの日本文学作品の受賞記録を残した[2]という。

その後、多和田葉子がさらに三部作[3]の創作に意気込み、『地球にちりばめられて』（2018年、講談社）、『星に仄めかされて』（2019年『群像』雑誌掲載、2020年、講談社）と、続々第二作目まで発表した。三部作を創作するという作者の意志を尊重した上、そこで、論

---

1 選ばれた理由は、https://realsound.jp/book/2020/01/post-477230.html によると、「日本語とドイツ語を自在に行き来する越境的な創作活動」だそうである。

2 https://gendai.ismedia.jp/articles/-/58959（2021 年 1 月 10 日閲覧）

3 これはほぼ定説となっている。論者が『地球にちりばめられて』をはじめ、三部作として創作を考えていることを多和田葉子から直接に聞いた。また、週刊読書人ウェブ多和田葉子（作家）郷原佳以（東京大学准教授）（2019 年 5 月 18 第 3239 号)「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」（第 2 回 Hiruko は流れ続ける運命）https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3（2021 年 1 月 15 日閲覧）では本人もそれを認めている。さらに栩木伸明は「今作（『星に仄めかされて』のこと・論者注）は『地球にちりばめられて』の続編である。（中略）すでに第三作の執筆が予告されているので、とても楽しみである」と同じ見解を示している。https://www.bookbang.jp/review/article/633645（2020 年 10 月 10 日閲覧）

臺灣大學學術期刊論文

者がかつてエコフェミニズムの視点から第一部作の『地球にちりばめられて』を試みたことの延長線として、第二部作として位置付けられた『星に仄めかされて』をエコフェミニズムの視点から究明することにしたのである。研究手順としては、エコフェミニズムの視点から『地球にちりばめられて』と『星に仄めかされて』との両作品にある異同を比較対照する。次に、「神の子どもたち」、「踊る」の意味を探ることにより、ノーベル文学賞受賞日本人候補者の村上春樹と多和田葉子が出すメッセージの相違をも探求することにする。それが2019年以後、人類の生存を脅かしているコロナ禍に対して、どのような意味を持つかをも検討する。

二、『地球にちりばめられて』と『星に仄めかされて』との異同について

まず、両作品の異同を下記の項目に沿って見極めることにする。

（一）作品の構成・語り手・空間的移動から見た両作品の異同

『地球にちりばめられて』は 10 章によって構成されており、各章をそれぞれ違った語り手が語っているという形を採っている。それはクヌート（第一章、第七章、第十章、デンマーク人）、Hiruko（第二章、第六章、第九章、日本人）、アカッシュ（第三章、インド人）、ノラ（第四章、ドイツ人）、テンゾ/ナヌーク（第五章、デンマーク人）、Susanoo（第八章、日本人）と言った按配である。主役の Hiruko とクヌートが各自に語った 3 章のほかに、脇役のナヌーク、アカッシュ、ノラ、Susanoo が 1 章ずつ語っており、多和田葉子の作品ではかつて見られない複数の登場人物が交互に語る形を採った作品である。とはいえ、各章のプロットから見ると、物語の発端が Hiruko にあり、Hiruko が主役と見なされるはずだが、各語り手が終盤に Susanoo のいる所に集まったため、物語の主役は実は Susanoo だと言っても過言ではない。また、違った国籍を持つ登場人物らがコミュニケーションに使う言語はパンスカ語（人工語）、デンマーク語、マラーティー語、ドイツ語、英語、フランス語、ノルウェー語など

臺灣大學學術期刊資料庫

であることから見ると、多国籍、多言語で織り成して出来た物語の一端が分かった。それに、登場人物らがコペンハーゲン、オーデンセ、トリアー、オスロー、アルルと広地域に渡る移動を続けているため、グローバル時代の物語を描く意図が明確にされる。

それに対して、『星に仄めかされて』は、『地球にちりばめられて』と同様に 10 章によって構成されており、各章は同じく違った語り手が語っている。それはムンン（第一章、国籍不明[4]）、ベルマー（第二章、デンマーク人）、ナヌーク（第三章、デンマーク人）、ノラ（第四章、ドイツ人）、アカッシュ（第五章、インド人）、ニールセン夫人（第六章、デンマーク人）、クヌート（第七章、デンマーク人）、Hiruko（第八章、日本人）、Susanoo（第九章、日本人）、ムンン（第十章、国籍不明）と言った按配である。登場人物が広範囲を移動し続ける点では、両作品では変わりはないが、『地球にちりばめられて』と比べてみると、相違点が 6 点ほどある。1 点目は、語り手として新たに登場したムンン、ベルマー医師、ニールセン夫人（クヌートの母）の 3 名のことである。2 点目は、前作で言葉を口に出して話せなかった Susanoo が『星に仄めかされて』では、第一章、第八章、第九章、第十章で言葉を口に出して話せるようになったことである。3 点目は、ニールセン夫人（クヌートの母）の人物像の描き方である。前作では、グリーンランド青年ナヌークを支援するスポンサーで、子離れのできない母親のニールセン夫人[5]の形象だが、本作では夫に逃げられて異性の愛を拒まない自立的な女性である一方、息子のクヌートとはうまく意思疎通できない母親の形象へと移り変わっている。4 点目は主役の交代のことである。前作の主役 Hiruko、クヌートが本作では後景化し、前作の主役同様の Susanoo、そして

4 作品中「ものすごく遠くで生まれたのかもしれない。別の星で生まれて、地球に落っこちてきたのかもしれない」（P12）とある。

5 曾秋桂（2020）「AI のテキストマイニング技術によるエコフェミニズム文学研究への支援―多和田葉子『地球にちりばめられて』を例にして―」（『台湾日本語教育論文集』第 35 号 P194-216）台湾日語教育学会でニールセン夫人が支援しているグリーンランド青年ナヌークとの関係が息子クヌートよりも近いと明らかにされた。

臺灣大學學術期刊論文版權

Susanooを兄貴と見ているムンンが前景化されている。5点目は、目に見えない性格交換を行うことである。前作ではSusanooの所在を明かしたナヌークに本作では新たに登場したベルマー医師との性格交換が仕込まれており[6]、画期的な話題が盛り込まれている。最後は言語に重点が置かれてないことである。前作で言語を大きくクローズアップされているのに対して、本作では、ムンンとよく一緒に登場した妹分のヴィタが使っている「ラリラリ」（P12）と言った「特別な言語」（P12）を強調する以外、コミュニケーションに使う多彩多様で違う言語に重点は置かれていない。このように、両作品は連作とはいえ、主題が微妙にずれている。主題に関わる視点の移り変わりを次節で見てみよう。

（二）両作品の異同から浮び上がる視点の移り変わり

『地球にちりばめられて』を簡単に言えば、日本国籍を持った主人公Hirukoが滅びた母国語を話す同郷人を探し、母国日本へ旅立とうとする物語である。テレビの放送番組に出たHirukoに言語研究者のクヌートは目を付け、放送後二人で会い、友達になった。後、クヌートが同郷人探しの旅に出ると言うHirukoに付き添い、旅先でインド人アカッシュとドイツ人ノラに出会った。ノラからノルウェイのオスローに行っている、日本人らしい名前を持つテンゾ（Tenzo、ナヌークのこと）の後を追って、オスローに行った。その時、テンゾは「鮨の国」の人ではなく、グリーンランドの出身であることが判明した。と同時にHirukoと同郷人らしきSusanooのことをテンゾから聞いた。すると、一行の5人がさらにSusanooがいる南フラン

6 「第一章ムンンは語る」（P9-43、35頁）、「第二章ベルマーは語る」（P44-82、39頁）、「第三章ナヌークは語る」（P83-123、41頁）、「第四章ノラは語る」（P124-159、36頁）、「第五章アカッシュは語る」（P160-189、30頁）、「第六章ニールセン夫人は語る」（P190-224、35頁）、「第七章クヌートは語る」（P225-254、30頁）、「第八章Hirukoは語る」（P255-280、26頁）、「第九章Susanooは語る」（P281-312、32頁）、「第十章ムンンは語る」（P313-342、30頁）の10章により構成された『星に仄めかされて』は、合計334頁となっている。各章の平均分量33.4頁を目安に見てみると、平均分量を超えた語り手のムンン、ベルマー医師、ベルマー医師と性格交換したナヌーク、第八章から第十章に渡り、語っているSusanooの重要性が一層明確にされる。ちなみに、前作に出たノラだが、今作品では環境保護を代弁している人物のように仕上げられており、前作品と繋がっている点では、意味の持つ語り手である。

スのアルルに行った。ところが、失語症に罹っている Susanoo とは言葉でコミュニケーションすることはできなかった。終盤では、失語症治療を専門にしているクヌートの先輩が勤めている病院に Susanoo を連れていくことで皆が合意した所で作品は終わっている。その続編の『星に仄めかされて』では、コペンハーゲンにある「王国病院」（P114）の半地下で皿洗いを仕事にする「相談人」（P14）付きのムンンとヴィタがいる。Susanoo は診察室がよく分からないため、ムンンがいる半地下に迷い込んで、初対面のムンンと言葉を交わした。その後、病院で偏屈な者と視されたクヌートの先輩のベルマー医師に仕事の手伝いをよく頼まれたムンンは、その診察室で診察を受けている Susanoo に再び会った。Susanoo の事が心配になり、ドイツからヒッチハイクで先に着いたナヌークは、ベルマー医師に会い、ベルマー医師の提案でベルマー医師と「一ヵ月ほど性格を交換」（P123）することにした。ニールセン夫人がベルマー医師と同じ病院で勤務する看護婦で、二人は恋人の関係となっているが、クヌートは母と先輩のベルマー医師が恋人同士であることを知らなかった。その後、空港のストライキに遭ったが、ドイツから無事に着いたノラとアカッシュ、Hiruko とクヌートの全員でベルマー医師の診察室に集まり、ずっと黙り続けてきた Susanoo[7]が沈黙を破り、「話をしないのはオレじゃなくて、君たちの方です。君たちは確かに多数の言葉をあびせかけてくれました。でも話したくないことはまだ何も話していませんね」（P275、下線部分が論者による。以下同様）と言い、Hiruko、クヌート、ナヌーク、ベルマー医師、アカッシュが持つ、他人に知られたくない「心の傷」（P122）を指摘し、対立している。丁度その対立した場面にムンンが現れて、そのムンンの後について来たヴィタの手に持つラジオから音楽が流れると、ムンンが皆に「踊

[7] https://news.yahoo.co.jp/articles/9fe6b7f756af41b3a91bcfe282966a91851f5eab?page=1（2020 年 10 月 10 日閲覧）にある多和田葉子の言葉を借りて言うと、それは、「Susanoo は日本の中年以上の男性のイメージです」のことになる。それは作品に出た「Susanoo は一つ上の世代に属しているのかもしれない」（P269）と呼応している。なお、曾秋桂（2019）「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』―日本が消滅したことの真意について」『台湾日本語教育論文集』第 33 号台湾日語教育学会 P208 では、Susanoo が 60 代で、Hiruko が 20 代と推定している。

臺灣大學開放典藏

る」（P318）ことを勧めたところで、「みんなの息が一つになってまるで足で呼吸しているみたいだ。不思議だな。（中略）それぞれ身体がこんなに違っているのに、今同じ曲に合わせて一匹の大蛇になって踊っている」（P325）とあるように、意見が対立して生じた齟齬、不和は、「踊る」ことにより解消された。すると、クヌートは滅びたかもしれない Hiruko の国を皆で船に乗って探しに行く旅[8]を勧めたが、結局、ベルマー医師、ムンン、ヴィタの 3 名は「ディナー・パーティ招待券」（P330）をもらうのに対して、Hiruko、Susanoo、クヌート、ナヌーク、ノラ、アカッシュの 6 名だけがロボットから船のチケットをもらい、Hiruko の国探しに船旅を続けることにした。出発する前、餞別にムンンが船旅を続ける 6 名に「星」のプレゼントをしようとした。内容的に見ると、両作品では確かに繋がっているものがあり、それを次に見よう。

1. 両作品で繋がっているもの

前作の作品空間をヨーロッパに限らず、アジア、アフリカ、アメリカ、カナダ、インドなどの広地域に設定したことからは、グローバル時代を描く意図が相変わらず強く感じられる。その上、「地球文化」（P40）、「地球人」（P41）、「地球」（P44）、「僕らはみんな、一つのボールの上で暮らしている」（P116）のように、地球で暮らしている人類を一つの単位に見る地球人の世界観が伺われる。「遠い国から来た Susanoo や Hiruko が俺と顔が似ていたりするのも地球に連続性があるからだ」（P116）と言ったナヌークの言葉、「それは同じ地球人だから気にするさ」（P305）と言ったアカッシュの言葉などからは、『星に仄めかされて』に地球人の世界観が脈流していることも分かった。これはエコフェミニズムの視点から「難民問題」、「言語問題」、「高度技術・文明を持つ日本国の消滅」、「環境保護」といった地球

8 作品中「いや、船の方がいいな。次の目的地はローマみたいに車で行ける町じゃない。船に乗って Hiruko の故郷を訪ねてみないか?国際航空網から抜け落ちてしまった地域でも、船なら行けるだろう。ここから地中海にまわりこんで、スエズ運河を抜けて、アカッシュの故郷経由で東南アジアを辿っていけば、その先がどうなっているのか、自分の目で確かめられるだろう」（P306）とある。

臺灣大學學術期刊論文

人の人類が直面すべき課題が反映された『地球にちりばめられて』の主題と一致している。例えば、前作でグローバル時代において重視された「環境保護」は、本作の「第四章ノラが語る」でも、「再生可能なエネルギー」（P125）、「環境保護論」（P140）とノラが代弁する形で受け継がれている。要するに、両作品では主題が確かに繋がっていると言えよう。一方、主題の展開が微妙にずれている部分も確かにある。

2. 焦点が内面化され、心的問題にずれている描写

『星に仄めかされて』では、意見が対立している一行を纏める役のムンンとヴィタには、苛められて心の傷を抱えて「相談人」[9]が付いている。また、ナヌークと性格交換をするベルマー医師は、病院の同僚から敬遠されており、孤立している。そして、ベルマー医師と性格を交換したナヌークは、恋人のノラとスポンサーのニールセン夫人から逃げ回っており、自己主張を出来ず、なかなか本音を言えない。それから、棄てられたわけではないが、Hiruko も両親が期待した通りの娘になれなかったことを心の傷に持っている。また、父親が行方不明になった上、母親を父親以外の男性に取られてしまったことを、クヌートは心の傷に持っている。最後、母親に見捨てられた Susanoo も、クヌートと同様に心の傷を抱えている。以上、列挙した 7 名の登場人物[10]が心に抱えている個人の内面的問題は、『地球にちりばめられて』ではグローバル時代において地球の人類が直面すべき総括的なエコフェミニズムの課題と比べると、『星に仄めかされて』では、焦点がより内面化されており、心的問題に当て

9 作品中「一人対その他大勢。Susanoo は仲間はずれで、いじめられっこ。子供の頃の誰かさんみたいだ。おいらは Susanoo の肩に後ろからそっと手を置いた。悲しい時にヴィタが肩に手を置いてくれると、いつも身体の芯が明るくなるから自分も同じことをやってみようと思ったんだ」（P315）の描写によると、ムンンとヴィタが多分いじめられたため、「相談人」付きで保護されていると推測されている。

10 はっきりと作品に言ってないが、アカッシュに「女性に変身したつもりでも、とっさの場合はスーパーマンかよ」（P296）、ノラに「ナヌークは君から逃げるために旅している。そのことが君は悲しくないのか?」（P298）と揶揄した Susanoo の言葉には、アカッシュが変身したことやノラがよく恋人に逃げられたことは、いずれも本人には「心の傷」が残っていると理解してもよい。

臺灣大學日本語文學系

られ、描写されていると言えよう。

（三）『星に仄めかされて』の「星」という意味

焦点がより内面化されたことのほか、書名にある「星」も探求すべき問題の一つである。作品中、「星」に触れた箇所は下記の通りである。ムンンが「別の星で生まれて、地球に落っこちてきたのかもしれない。気がついたらコペンハーゲンの近くで教師をやっている夫婦の一人息子になっていた。（中略）学校を出てからは、住み込みでこの大病院で働いている。ヴィタも同時に雇われた。ヴィタは妹じゃないのに鏡の前に並んで立つとおいらと顔が似ている」（P12）とムンンの出自に触れている。「別の星で生まれて、地球に落っこちてきた」（P12）と思うムンンは、ニールセン夫人がかつて見た「サイエンス・フィクション映画」（P198）にある、火星人が地球人を洗脳し、火星人の子供を育てさせる[11]ことと符合しているかもしれない。また、ヴィタが愛用しているラジオには、「星のシールを貼ったボタン」（P317）がある。そして、「病院で使われる食器を洗う作業場」（P333）の半地下に戻る時、「エレベーターに乗ると遠くで星が唸るみたいな音が聞こえ始めた。星は唸らないとヴィタは言うけれど、おいらは唸ると思う」（P333）とあるように、「星」がムンンとヴィタの二人だけに関わっている[12]。

また、Hiruko の国探しに船旅をしようとするクヌート一行の 6 名を、ムンンは半地下の自分の部屋に案内し、「自家製のプラネタリウム」（P334）を見せた上で、ナヌークに「レグレス星」（P334）、ノラ

---

11 「科学の恐ろしく発達したどこかの星の人たちがわたくしたちを洗脳し、体内に特殊なホルモンを注入して母性愛を誘発し、子供を押しつけて育てさせているのだとしたら。そう思うと息子に違和感を覚える自分を責める気持が消えて、気分が楽になりました」（P199）とニールセン夫人が息子との不和を合理化している。

12 ノラが「アレッポまでシリア人の恋人を追っていったことがあって、結局彼は見つからなくて、仕方なく砂漠に入って一ヵ月くらい過ごした。夜になると寂しさで身体が冷えて、星がぼこぼこ宝石みたいに空にくっついていて、手を伸ばせば摑めそうだった。でも取れないのよね、当たり前だけれど」（P337-338）と語った経験談にも出ている。

に「アークトゥルス星」(P334)、アカッシュに「ベテルギウス」(P335)、クヌートに「シリウス」(P336)、Hiruko に「カペラ」(P336)、Susanoo に「アルタイル」(P338) とそれぞれ餞別を贈った。このシーンについては、多和田葉子は、「人間がどれだけ境界線を引いて国境を作ろうと、星から見てみると地球というものが一つの大きな国。人間がそれぞれ固有の言語や文化を知り、考えることで境界を越えて地球は一つになっていくのではないでしょうか。生きている間に第 3 次世界大戦が起こることを私はいちばん恐れていましたが、今回、新型コロナウイルスが登場して軽々と国境を越えていき、思いもかけない方向から課題を与えられた気がしています。人類が境界線を越えて、一つにならなければ解決できない課題ですから」[13]と深い感慨を漏らしている。多和田葉子の発言からは、地球上の人間で出来た国家や民族の間でいくら境界線を引いたり、国境を作ったりしても、星からすると、所詮地球が一つの大きなボールに過ぎず、互いの相違を知り、考えることにより境界を越えて地球は一つになっていくことがありうると「星」を登場させたと考えられよう。

要するに、書名『星に仄めかされて』の「星」は、地球上の各国家や民族を相対化し、他の星と並列化することで『地球にちりばめられて』から引き続いた一つのボールで暮らす地球人の世界観を強化するキーワードだと言えよう。しかし、新型コロナウイルスが登場して軽々と国境を越えていくのに対して、各国が水際作戦を行うため、人間はグローバル時代の 2019 年前と同じく軽々と国境を越えていくことが出来なくなった。国と国との境の壁が新型コロナウイルス禍のせいで、一層強まっているため、国境という意味がグローバル時代で言った国境とはまた違ってくる。このように、国で築いた壁、そして人間の持つ心の壁は、こんな時代にいるからこそ、意味深長なものに見えてくる。

[13] https://news.yahoo.co.jp/articles/9fe6b7f756af41b3a91bcfe282966a91851f5eab?page=1（2020 年 10 月 10 日閲覧）

臺灣人文學術期刊資料庫

三、焦点化された「心の傷」と「踊る」——「神の子どもたちはみな踊る」

第二節で述べたように、『地球にちりばめられて』でグローバル時代において地球人の人類が直面すべき総括的なエコフェミニズムの課題が見られる。それと比べると、『星に仄めかされて』では、人物の内面的問題「心の傷」（弱み）が焦点化されている。本節では、「心の傷」が「踊る」、「神の子どもたち」と関連させてその意味を深ってみる。

（一）「神の子どもたち」とは

登場人物の Hiruko といえば、日本の『古事記』に出た神のイザナキとイザナミが最初に産んだ子供のヒルコが思い出される。その一方、Susanoo といえば、その後に生まれたスサノオノミコトが連想される。作品中、Susanoo に「弟」（P324）と呼ばれたムンンは、Susanoo のことを「兄貴」（P315）と呼び、星を Susanoo に贈った時に「最愛のきょうだい、アルタイルよ。空高く飛ぶ大きな鳥のように!」（P338）とも言った。Susanoo を兄と見ているムンンは、「ヴィタは妹じゃないのに鏡の前に並んで立つとおいらと顔が似ている」（P12）と仲の良いヴィタを妹と見ている。このように、Hiruko と Susanoo がイザナギとイザナミの「神の子ども」であり、また Susanoo からすると弟分に当たるムンン、そしてその周縁にいるヴィタを含めてみると、この 4 人が「神の子どもたち」と言ってもよかろう。

前作で言葉に出して話せなかった Susanoo は、『星に仄めかされて』の第八章、第九章では、Hiruko に「やっと自分の話をしてくれましたね」（P274）、クヌートを「君は狼の毛皮を着た羊だ」（P280）、ベルマー医師を「青春を取り戻したくて悪魔に魂を売ってしまった男」（P282）、アカッシュを「女性に変身したつもりでも、とっさの場合はスーパーマンかよ」（P296）、ノラに「ナヌークは君から逃げるために旅している。そのことが君は悲しくないのか?」（P298）と、登場人物の一人一人を揶揄し、辛辣に批判している。また、今まで Susanoo の失語症を心配し、親切を尽くしてくれた人達に対しては、Susanoo は、「話すことができなかったのはオレじゃない。君たちの

臺灣大學圖書館期刊資料庫

方だ。確かに声は出していた。でも君たちは口を開け閉めしているだけで大切な話は何もしていない」（P298）と、長年相手が人に知られたくない心の傷・トラウマを暴き出している。Susanoo の批判は冷酷だが、真実を突き止めて的を外れてはいない。

（二）「踊る」という意味

Susanoo に弱みを責め立られている Hiruko の一行と対立している時に現れたムンンは、皆で手を繋いで「踊る」ことを勧めたところ、「答えは、踊りの中にある。さあ、もう少し踊ろうよ」（P325）と Susanoo もそれに賛同し、皆の後押しをした。結局、「みんなの息が一つになってまるで足で呼吸しているみたいだ。不思議だな。ノラの樫の木みたいな身体、アカッシュの柳みたいな身体、クヌートのぬいぐるみみたいな身体、それぞれ身体がこんなに違っているのに、今同じ曲に合わせて一匹の大蛇になって踊っている」（P325）。そこから意見を異にしたグループの人であっても、他人のステップ（考え方）を合わせて「踊る」（行動する）ことにより、相互の相違を超えて、目標とする異体同心に達することが可能となると示唆されている。なお、作品中「踊る」場面がもう一箇所ある。それは、ベルマー医師に仕事の手伝いを頼まれたムンンが、診察室で蛇が動いていることを見て、恐くなって半地下に逃げてきた時のことである。半地下でヴィタの「踊りが始まると、部屋の匂いが変わる。おいらも立ち上がって腰を左右に揺すり始めた。すると怖いシーンが頭の中からどんどん振り落とされていった。やっぱり踊りが一番だな」（P36）と思うようになった。この描写からは、「踊る」ことが「怖いシーンが頭の中からどんどん振り落とされてい」くことに繋がり、安心させてもらえる行動だと理解されよう。要するに、安心してもらえる「踊る」という動作を、Hiruko、Susanoo、ムンン、ヴィタの「神の子どもたち」を始めとする一行がすれば、相互の相違を超えて、異体同心を目標に達成することが可能だということになるのである。これは、まさに多和田葉子の言葉の「人間がそれぞれ固有の

臺灣大學學術期刊資料庫

言語や文化を知り、考えることで境界を越えて地球は一つになっていくのではないでしょうか」[14]で述べられたとおりである。

（三）村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』（2000 年、新潮社）と対照しつつ

前節の「神の子どもたち」と「踊る」を合わせると、村上春樹の有名な短篇小説集『神の子どもたちはみな踊る』[15]が容易に想起されよう。周知のように、『神の子どもたちはみな踊る』（2000）は村上春樹の初連作短篇集であり、最初に「連作『震災のあとで』その一～その六」という名で続く「UFO が釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」（『新潮』1999.8-12 連載）の 5 連作に、書き下ろしの「蜂蜜パイ」が加えられ、「震災のあとで」の一語が削除された形で出版された単行本である。「蜂蜜のパイ」以外の 5 作品とも、心にあるトラウマを最後に克服できたかどうか明確な答えを得られないまま物語は終わっているが、これだけを見ると、確かに各短篇の結末だけに注目して、野中潤が言った「ばらばらな状態からの再生はやはり＜悲観的な希望＞としてしか描き得なかった」[16]ことになるかも知れない。しかし、ここでは、むしろ村上春樹は、団塊の世代や団塊ジュニアのありふれた市民を主人公にしている点に注目すべきである。再生の完成度や達成度を論じるよりも、震災を契機に主人公たちが今まで心に抱えたまま気づかないで解決の糸口すら見出せなかった深刻なトラウマに対し、何らかの方法でトラウマと向き合うことでトラウマの存在に気が付く。また、そこから次のステップへという行動の展開が見られる点に注目すべきである。要する

---

[14] https://news.yahoo.co.jp/articles/9fe6b7f756af41b3a91bcfe282966a91851f5eab?page=1（2020 年 10 月 10 日閲覧）

[15] 「アイロンのある風景」にある焚き火も、「かなり前のことだけれど夏のキャンプで、みんなで輪になって踊る練習をしたことがあった。あれは楽しかったなあ。焚き火のまわりで火の粉も舞っていた。また踊りたいなあ」（P318）に見られる。

[16] 野中潤（2012）「＜悲観的な希望＞を生きる－連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』論」宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九九〇年代』P74 おうふう

臺灣大學學術期刊資料庫

にトラウマを超えたり、解決したりするかどうかよりも、トラウマに向き合うことの重要さが村上春樹によって提示されていると言えよう。

四、結論——エコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』

本論文では、エコフェミニズムの視点から、前作『地球にちりばめられて』を試みた成果と対照的に、今作の『星に仄めかされて』と考察・比較した結果、『地球にちりばめられて』で一括りにできたグローバル時代において地球人の人類が直面すべき外的なエコフェミニズム課題と比べて、『星に仄めかされて』では、人物の内面的問題「心の傷」（弱み）が焦点化されていることが分かった。

とりわけ、作品中、「神の子どもたち」と見てもよい登場人物と彼らが「踊る」ことからは、村上春樹の短篇小説集『神の子どもたちはみな踊る』が連想される。村上春樹の短篇小説集『神の子どもたちはみな踊る』にまで視野を広げて考えてみると、トラウマと向き合うことでトラウマの存在に気が付き、そこから次のステップへの行動を展開する処方は村上春樹の提示したことが明瞭になっている。それに対して、人間同士がどれだけ境界線を引いて壁、国境を作ろうとしても、遠く輝いている星から見れば、所詮一つの地球というボールで暮らしている人類に過ぎず、人間同士で作った壁も、他人のステップ、ペースに合わせて「踊る」ことにより、相互の相違や意見の齟齬を乗り越えられるということは、多和田葉子が村上春樹と違い、提示したもう一つの処方だと言える。

2019 年以後、ノーベル文学賞受賞日本人候補者として名前が列ねられた村上春樹と多和田葉子は、言うまでもなく世界から脚光を浴びている。二人が人間が抱えている個人の内面的問題「心の傷」（弱み）に対処するメッセージでは相違している。それにも関わらず、いずれも、2019 年に爆発した新型コロナウイルスのパンデミックのため、グローバル時代の良し悪しが盛んに検討されている中、再度

臺灣大學學術期刊資料庫

耳を傾けるべき見解である。特に、各国がコロナ禍を防ぐために築いた壁、コロナウイルス感染を回避する人間の持つ心の壁が大きな問題になっている現在、一つの生き方としてグローバル化した世界が再構築される点では、とりわけ意味深長なもののように響いて聞こえてくる。

【付記】本論文は、109 年度科技部研究計画案（MOST 109-2410-H-032-030 MY2）による研究成果の一部分である。

【テキスト】

村上春樹（2000）『神の子どもたちはみな踊る』新潮社
多和田葉子（2018）『地球にちりばめられて』講談社
多和田葉子（2020）『星に仄めかされて』講談社

【参考文献】
【書籍・雑誌関係】

野中潤（2012）「＜悲観的な希望＞を生きる－連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』論」宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九九〇年代』おうふう
曾秋桂（2013）「通過儀礼として見た村上『神の子どもたちはみな踊る』論―トラウマと向き合う物語の装置―」『台湾日本語文学会学報』34 号台湾日本語文学会
曾秋桂（2014）「生に寄り添う村上春樹の「モラル（倫理）」の体現―日本の二つの大震災によるトラウマを超える模索―」『比較文化研究』NO.114 日本比較文化学会
多和田葉子・ロバートキャベル対談（2015）「やがて希望は戻る一旅たつ『献灯使』たち」『群像』1 月号講談社
曾秋桂（2019）「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』―日本が消滅したことの真意について」『台湾日本語教育論文集』第 33 号台湾日語教育

臺灣大學圖書館期刊資料庫

学会
曾秋桂（2020）「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子『地球にちりばめられて』—国境無き新しい夢を育むことへの示唆—」『台大日本語文研究』三十九期台湾大學日本語文學系
曾秋桂（2020）「AI のテキストマイニング技術によるエコフェミニズム文学研究への支援—多和田葉子『地球にちりばめられて』を例にして—」（『台湾日本語教育論文集』第 35 号

【ネット資料】

https://realsound.jp/book/2020/01/post-477230.html
（2021 年 1 月 10 日閲覧）
https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3
（2021 年 1 月 15 日閲覧）
https://www.bookbang.jp/review/article/633645
（2021 年 2 月 10 日閲覧）
https://news.yahoo.co.jp/articles/9fe6b7f756af41b3a91bcfe282966a91851f5eab?page=1（2020 年 10 月 10 日閲覧）

臺灣大學學術期刊資料庫